

兵器化する科学主義

— 両論併記で「天地創造」を科学する博物館 —

小 森 真 樹

現職大統領が「気候危機は人為的に作られた」と口にし、ソーシャルメディアでは新型コロナウイルスやウクライナ侵攻は闇の政府の企みだと陰謀論が飛び交う——近年のアメリカ合衆国における「真実」の一段面である。ここ日本でも、戦時中の性暴力や少数先住民に対する否定論の主張が一部で影響力を高めている。本研究は、シンポジウムのテーマ「世界史における「学知」の政治的ダイナミクス」に応える形で、ポスト真実的状况における学知を理解するためのモデルについて考えてみたい。

イデオロギーによって人々が「分断」しているという理解のモデルは、一種陳腐化しているようにも見える。その

内実や仕組み、歴史などの点からそれはいかなる範囲で有効なのかについて精査が必要である。人々が或る事実を「真実」と認めるとき、その根拠はいかに構成されるのか？

そこではいかなるコミュニケーションがなされているのか？ 本研究は、こうした問いに、ミュージアムにおける信仰と科学に関するコミュニケーションを考察することによって答えようとするものである。考察する事例にはキリスト教保守系団体の「天地創造科学博物館」を取り上げる。人間の起源を「神の創造」とするか「生物の進化の結果」と見るかという命題は、進化論の登場以来アメリカ社会で大きな争点とされてきた。その論争は社会運動として政治

兵器化する科学主義（小森）

化もしながら展開した。こうしたなかで、言論が議論を交わすためというよりも、政治目的を達成する手段として用いられるようになった。つまり、「言論」を兵器化して戦術とする傾向が高まったのである。

本研究では、宗教保守派が対抗言論の戦術を研ぎ澄ませていく歴史を概括した上で、戦術と博物館との関係について論じること、歴史や科学といった「事実」を権威づけるメディアたるミュージアムが置かれている現況について歴史的に把握する。ミュージアムが「真実」を捏造する装置としていかにして機能するのか、そこでは対称性を主張する言論がいかに利用されているのか。これらについて考察しながら、「深まる分断」などといわれるアメリカ社会を理解するモデルの有効性について批判的に検討する。

本論は以下の構成で論じる。第一章では科学主義と対抗言論の観点からキリスト教右派の運動について振り返り、戦術として言論が用いられるようになった過程を歴史的に脈づける。第二章ではその歴史の上で発明された「天地創造博物館」について概観し、続く第三章にて、その代表例であるケンタッキー州のクリエーション・ミュージアムを事例に、展示や催しによる「両論併記」の言論構造を精査する。第四章では、この博物館に関するメディアの語りを分析し、社会的受容すなわち戦術がもたらした効果について

を確認する。これらを踏まえて、第五章では、両論併記論法によって科学主義がいかに兵器として機能するのかについて総括する。

一 進化する創造論戦術：法と政治

（1）天地創造・進化の対抗と「科学主義以前」

アメリカ合衆国においては、人間という存在の起源にまつわる「進化対創造」の対抗の起りは一九世紀半ば頃に求められる。本稿においては、この対抗を論争として捉えるのではなく、宗教・科学の教育領域における法的・政治的運動として把握していく。つまり、言論を兵器化し、特定の集団が目的を達成する手段として用いる戦術の系譜として理解する。本論を通して明らかにするように、「対立する説の間の論争」というほとんど実在しないものを構成することが、創造論者の戦術にとっては極めて重要なのである。

社会運動の歴史においては、正当性を主張するために様々な方法が創案されてきたが、本研究では「科学主義」に着目し、その導入以前と以後に分けて理解したい。¹⁾

一九世紀半ばの進化論の普及とそれに伴う聖書の高等批評運動という、近代社会に合わせて神学を人間の知識体系に組み込んで調停しようとする流れは、一種の保守反動を

生み出した。「天地創造主義 (creationism)」の概念は対立概念として構成されたもので、実際のところ、「創造論者 (creationist)」という用語も記録上はチャールズ・ダーウィン (Charles Darwin) が反対派に対して「創造」に「イスト」をつけて使ったのが初出と言われている²⁾。

初期の「創造論者」は科学一般を許容しない立場を採るものを指す言葉だったが、彼らは進化論科学を否定し、一九二〇年代には改革主義運動を展開していった。公立学校でヒトの進化について教育することを禁止する「反進化論法」の成立を目指したものである。この背景には、後に大統領候補にもなる民主党の有力政治家ウィリアム・ジェニングス・ブライアン (William Jennings Bryan) が「反キリスト教的教育」として進化論の普及を危惧した援助もあった。

それを受けて進化論支持者からは、言論の自由を争点に、進化論の公教育禁止を違法とする裁判が次々と起こされた。最も有名なのは、一九二五年のテネシー州デイトンでおこなわれたスコープス裁判である³⁾。アメリカ自由人権協会 (American Civil Liberties Union, ACLU) は、公立教育の現場で進化論を教えて逮捕される教員を広告で募集し、進化論を禁じる法律を裁判の争点にしようと試みた。これを引き受けた高校教員のジョン・スコープス (John T.

Scopes) が生物の時間に進化論の話をしたと証言し、クレンス・ダロウの弁護のもと、ブライアンによる検察側からの審議を受けた。「ヒトの進化」を教えることの違法性が争われたこの裁判は「モンキー裁判」の名で知られ、教会と政府の分離 (separation of church and state) を巡る問題として創造論を社会に知らしめた。結果スコープスは有罪判決を受け、一〇〇ドルの支払いを命じられ、控訴を試みたが、「テネシー州の規定に照らせば違反金が不当に高い」という理由でテネシー州の最高裁により裁判自体が無効化された。反進化論法を廃止しようとしたアメリカ自由人権協会の思惑は外れ、結果的に同州では一九六七年まで反進化論法が有効であった。

この過程で、創造論運動は言論の「型」を生み出すことになる。それは、「学説と事実」のギャップ説と、授業時間均等という二つに集約されよう。テネシー州で一九七三年から二年間有効であった「創世記法案」には以下のことが明記された。人類と世界の起源について教育する際に「進化論はあくまでひとつの理論 (theory) であり科学的真実 (scientific fact) ではない」と明記した教科書を使うこととして、両者は同じ「理論・説」であるのだから、創造論と進化論およびその他の理論は同じ時間数だけ教える必要があること、この二点である。創造論者の主張によれば、

進化論とは数ある世界の成り立ちを説明する「理論・説」に過ぎないのであり、すなわち、事実として認定されていない一つの仮説に過ぎない。これを、学説と事実の間には隔たりがあるという意味で「ギャップ説」と呼ぶ。こうした論理で、創造論は進化論と並列とされたのである。ここに明記された「並列」の論理は、その後の創造論・進化論の対立においても極めて重要な役割を果たすことになる。同時に、その二つは「学説」なので、創造説、進化論やその他の説は同じ時間数だけ教えるなど、公的な領域で同程度平等に扱う、すなわち両論併記する必要があると主張される。この授業時間均等という争点もまた、このとき確立された。

創造論教育に対する規制の禁止やその自由化を法的な領域で主張するために、こうした二つの論法を用いて対称性を主張するという一種の型が生まれた。これが科学主義以前の「創造論・進化論論争」の状況である。

（2）科学主義以降の創造論

一九七〇年代後半になると、創造論者は、創造論の妥当性を主張するためにより積極的に「科学」を応用し始めることになる。つまり、創世記法案と同様の論理で、進化論は一種の理論に過ぎないと主張し、また同時に、創造論が

また別の「科学」的理論なのだと主張したのである。この論法で、公立教育で「創造論」と「進化論」が等価に扱われることを目指した運動が展開された。これが「創造科学（creation science）」と呼ばれるものである。

公教育において聖書の朗読および祈りの時間を設けることが違憲であるとされた一九六二年・六三年の最高裁判決への反発はその推進力となった。公教育から排除された創造論者が別の方法を模索したのである。この時期、スプートニクショックや『種の起原』出版一〇〇年記念を受けて全米に起こっていた科学教育への関心の高まりもあり、それに呼応するように科学主義化した創造論運動は全国規模で大規模に展開していった⁵⁾。

初期の創造科学者には、自然科学の博士号さえ取得した者も少なくない。彼らは聖書無謬説の立場から聖書が宇宙の起こりなどを含めたすべての歴史的事象を正しく説明しているとする。そのため、様々な科学的根拠を利用して聖書の記述を証明しようと試みる⁶⁾。創造科学には多様な立場がある。聖書の記述のすべてが字義通りの事実であり、現在は世界が創られてから六〇〇〇年程度であるという「若い地球説（young Earth creationism）」や、進化自体は認めるがそれは神の導きによるとする「有神論的進化（theistic evolution）」さらに「世界の起源や生物進化は「知

性あるなものか」の力を仮定しないと説明がつかないと主張し、そこに神の存在を含意しようとするインテリジェント・デザイン説 (intelligent design theory⁹⁵⁾以下「ID説」とする)もまたこの変種である。

公立教育を巡る対立の過程で創造論は「科学」として主張されるようになった。すなわち創造科学とは、科学の理論であるという主張を用いて、宗教的要素が公立教育から排除されるのを回避しようとする運動の戦術である。一九八一年ルイジアナ州では、進化論という「理論」と同様に創造科学を科学の一種として主張する、先のテネシー州の創世記法案と同様の論法で、創造科学法案が可決した。それに対してアメリカ自由人権協会は、教会と政府の分離を規定した憲法に違反するとし裁判に訴えた。一九八七年、最終的に連邦最高裁判所は、合衆国憲法修正第一条の言論の自由などを根拠に、「進化論と創造論の授業時間を均等化する州法」が違憲であるとする「エドワード対アギラード」判決を下した⁹⁶⁾。

(3) ネオ創造論

法的規制や時勢に応じてその手法は多様化し、ネオ創造論とも呼ばれる新たな一群も生まれている⁹⁷⁾。二〇〇五年には連邦地方裁判所において、九年生の生物の授業で進化論

の教科書を使う場合にはID説も併せて教える義務があるという、ペンシルヴァニア州ドーバー教区のポリシーを違憲とする判決が出た。ID説とは、「神」などの文言を使わないものの事実上聖書信仰を教育しようとする創造論であり、その言論戦術である。全国の各州法に優先する連邦法がそう定めたのである。この裁判は、当該教科書の題が『パ نداと人の (Of Pandas and People)』であることと、モンキー裁判にも掛けて、「(ドーバー・) パンダ裁判」と呼ばれる。他方で、戦術としてはほとんど同じようなたちを取るが、創造科学者の中にはID説を別の学説として見て否定する者も多い。創造論共同体は「運動体」としては同じ方向に向かうものの、その内部には学派としての多様化や対立があることにも留意したい。

さらにドーバー判決以降普及したのは、「生物進化論に反対する証拠 (evidence against evolution)」戦術である。これは、「世俗的な問題としてなら」証拠を提示することが可能であったアギラード判決の文言に注目して、生物進化論の不備について教えることを公教育で義務化しようとする戦術である。つまり、創造科学も同じように教えてくれ、同じ時間だけ教えてくれというのではなく、進化論への反駁材料を教えてくれ、その中には創造科学も入るのだ、という論法である。これは、創造論者にとって憲法

修正第一条「国教樹立の禁止」にも抵触しないように見える点でも魅力的だった。

他方で、「生物進化論を批判的に分析する」戦術もある。二〇〇二年オハイオ教育委員会でID説を検討する際に、デイスカバリー研究所の創造科学者スティーヴン・マイヤー（Stephen C. Meyer）氏が考案したもので、進化論の複数の説の間に論争があることを教育する義務を設けようとする戦術である。「論争教育」論術とも呼びうるこれは、アメリカの一般的な学校教育の方法と馴染みがよい点で戦術的であったが、進化論の立場からは、生物進化があつたかなかつたかについての論争は既に存在しないと反論された。

「創造科学」の登場以降、創造論者による公立教育への働きかけは体裁上「科学論争」という形をとっている。近年ではID説など「ネオ創造論」の方法へと展開したが、法的な観点では公教育での制限は強まっている。

（4）「宗教右派」の形成

しかし、社会的影響力という観点では創造論は決して力を失ったわけではない。政治的な運動として歴史を振り返れば、中絶の権利の政治争点化が分水嶺となった。人工妊娠中絶の制限を禁じた連邦最高裁のロー対ウェイド判決

（一九七三年）の後、聖書信仰に反する中絶を社会で禁じようと政治化し、福音派を中心に「宗教右派」が形づくられたのである。中絶権や反同性婚法制化、因習的な家族形態など宗教保守的な価値観に基づく観点から政策への影響を及ぼすことを重視する宗教右派は、白人教会の福音派に加えて、他教派・他宗教の保守派、黒人福音派などで構成される。地域は、南部、中西部、西部などのバイブル・ベルトと呼ばれる地域に多い。

創造科学は聖書の読書会などを通じて普及し、さらに創造論の立場に基づいた学校・研究機関も徐々に増えている。^①二〇一九年のギャラップ調査によれば、アメリカの成人のうち「自身に最も近い立場は？」という問いに創造論と答えているのが四〇%である一方で、「ヒトは原初生命体から数百万年をかけて現在の姿になった」、つまり進化論と答えたのは二二%に過ぎない。^②また、有神論的進化も三三%にも及ぶ。^③アメリカ合衆国統計局調査によれば、二〇一九年一月三日付でアメリカ合衆国の総人口は約三億二八三四万人とされる。^④ここから算出すると、人間の起源と歴史に多かれ少なかれなんらかの形で神の力が関わっていると考える立場が約二億四〇〇〇万人、そのなかでも「約一万年前に神によって人類は現在と同じ形で創られた」と考える立場が約一億三一三〇万人存在していること

になる。統計から言えば、創造論とは決してアメリカ国内の一部の少数派の信仰ではなく、同時に過去の遺産でもない。それは形を変えながら今もアメリカ社会の主流に息づいている¹³⁾。

二 天地創造科学博物館の概要と登場の背景

公教育で天地創造が教えられなくなってきたことで、宗教右派として政治化したグループは言論戦術を創案してきた。「科学主義」を導入し創造科学を根拠とすることで外形的には「科学論争」という立場から対抗言説を紡いできた。ミュージアムはその手段の一つとして採用されたものである。天地創造博物館はこうした文脈で理解できる。

創造科学の研究や教育にミュージアムが利用されるようになったのは、一九八〇年代以降のことである。「(天地) 創造博物館 / (天地) 創造論者博物館 (creation museum/creationist museum)」という用語を定義すれば、創造論を科学的観点から展示教育することで、創造論の立場から進化論に対抗する博物館のことである。つまり、その目的は対抗手段の提供にあり、創造科学の正当性の根拠となる「科学性」をさまざまな手段で提示することを通じて、来館者に「真理」を保証する展示施設である。この意

味で、教会等の各種宗教施設の視覚展示はこの範疇にない。それらは「真理」の正しさを「科学理論」として理性的に根拠付けようとするものではないからである。本研究では用語をこのような意味で用いる。

二〇二三年一月現在までに、世界には四〇館の天地創造博物館が存在している(図1)。カナダ、イギリス、オランダ、ドイツ、セルビア、トルコ、中国といった国が挙げられるが、その約七割(三〇館)がアメリカ合衆国に存在する。多くは一九九〇年代以降に開館している。アメリカ合衆国内での分布を確認すると、宗教保守派の層が伝統的に分厚いバイブル・ベルトに多い¹⁵⁾(図2)。目的や方法から分類するならば、天地創造博物館は「教材型」「歴史博物館型」「娯楽施設型」の三種に分けられる。後章で論じるケンタッキー州のミュージアムは、娯楽施設型の特徴が強い。(図3)

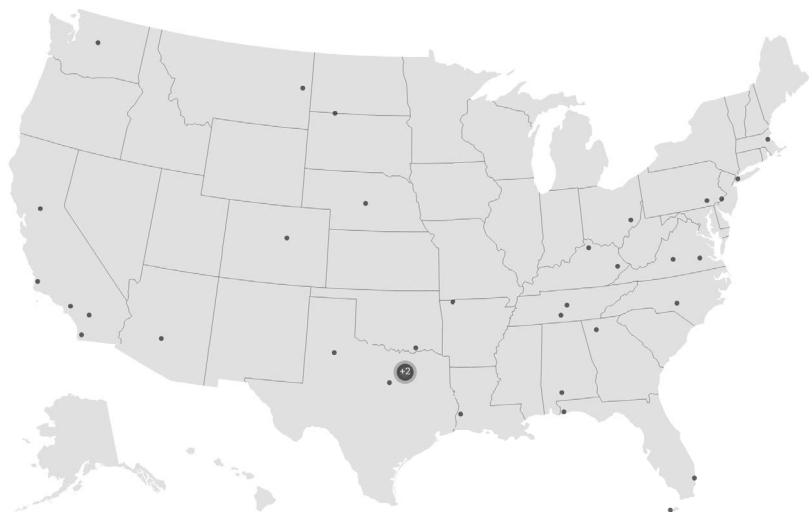
他方、公教育の外で取られる創造論の教育手段そのものも多様化しており、これらにミュージアムを位置づけるならば次のようになる。キリスト教文化の教育を三種に分ければ、①私設学校やホームスクールなどの「プライベートセクターの教育事業」、②テーマパークやキャンプなど「体験型の娯楽産業」、③映画や音楽、小説などといった「創作型の文化芸術」の領域がある。ミュージアムはこれら全ての特徴を併せ持つことが可能な総合的なメディアであ

天創博物館 (二條)

図 1 : 天地創造博物館一覧 (筆者作成、2023 年 1 月)

国 (数)	名称	所在地	年	概要
アメリカ合衆国 (30)	アーカンソー州 The Museum of Earth History ※劇場 The Passion Play の付随 ※前項と同じ施設内、The Passion Play 付随	Eureka Springs ※ Dallas に移転	2006? -2011 閉館	キリスト教受難劇 The Passion Play の公演地域内にオーブン・トマス・ジャーン博士のブロンズ像で、2011 年にはダラスにある福音派教育の専門学校 Christ For the Nations Institute (CFNI) 内へ移転。
	アラバマ州 Dinosaur Adventure Land Jerry Patwell Museum, Liberty University	Eureka Springs Repton Lynchburg	1966s - 閉館 2020- 2003	The Sacred Projects を前導とし、アーバーク Great Passion Play Theme Park の一部として開館。 ケン・トバーインが 2020 年に Infinite Light Labs Inc を登記し、かつてロリタダ州ペンサコーラで運営していたパークを再建したもの。 エヴァンジェリカル系最大規模の高等教育機関リバーク大学附属施設。
	オクラホマ州 Museum of Creation Truth Mobile Museum of Earth History, Creation Truth Foundation Akron Fossil & Science Center/The Creation Education Museum ※ Creation and Earth History Museum ※ The Museum of Creation and Earth History から改名	Bokchito Noble ※ 勝つ物巡回型 Copley Santee	※ 1992 記載有 1989- 2005- 1992-	老夫婦エートン夫妻による小規模展示館。 Eureka Spring の The Museum of Earth History のトマス・ジャーンによるエリクソン賢女型の博物館構想。前項の Museum of Creation Truth とは関連がない模様。 ともに同施設内だが、Akron Fossil & Science Center での "Community Education" と The Creation Education Museum の "Creation Education" とを分けている。 ヘンリー・モリスによる Institute for Creation Research (ICR) が当初この場所で博物館を開館したが、2007 年同館は閉館、翌年 Life and Light Foundation を運営する Seanhobbes Laboratory, Inc に施設が売却され開館した。 Cabazon Family Partnership and MKA Cabazon Partnership に購入されて以後「若い地球説」的解釈が加えられ、博物館も併設。
	カリフォルニア州 T-Rex Museum, Cabazon Dinosaurs	Cabazon	1975-	Cabazon Family Partnership and MKA Cabazon Partnership に購入されて以後「若い地球説」的解釈が加えられ、博物館も併設。
	DINO Creation Museum Creation Research of the North Coast Museum	Sacramento Bayside	?、閉館 ※ イスラエルへ移転との記載有 計画中	セルビアの Center for Natural Studies の展示等、イスラエルへ移転との記載がウェブサイトにある。アメリカでの登記住所はニューヨーク州 Richmond Hill.
	Adventure Safaris Dinosaur Warehouse and Exploratorium (Dakota Macs Exploratorium and Dinosaur Warehouse) Creation Museum	Santa Maria Petersburg	2011- 2007-	Creation Research of the North Coast が団体、イベントやプログラムの経営、ゾアの箱舟型で学習するエクスプローリウム (体験教育型科学博物館)。
	Ark Encounter Creation Science Hall of Fame	Williamstown Northern Kentucky area	2016- 計画中	「若い地球説」系創造論教育の最大組織 Answers in Genesis Ministry (AIG) の科学博物館。館長は本邦でもアメリカからシカゴへ移転したケン・トバーイン。本論文で詳述。
	Grand River Museum Camp Sunrise Museum	Lemmon Fairmount	1998- ?- 閉館	AIG の施設近郊に別組織が計画したもので、創造論者の歴史博物館のような内容が予定され恐竜化石が並べられる施設に開館した考古学博物館。化石並びは展示。
	サウスダコタ州 ジョージア州 テキサス州	Glen Rose Crosbyton Dallas ※ Eureka Springs から移転	1984- 1998- 2011 - 閉館 ※ 母体組織は 1972-	創造論系の中核的なプログラムとして開館。2020 年現在サイトに博物館は不掲載。 子どもの読経やプログラム山で祭すなどしてきた「若い地球説者」カーン・バークが開館した最初期の創造博物館。自玉の展示物はゾアの洪水以前の景観を再現する「高山生物園」実験カブラセル。 化石復元の技術を学ぶことで古生物学の世界へ入り創造論の立場で活動している。
	The Creation Evidence Museum Mt. Blanco Fossil Museum The Museum of Earth History in Dallas ICR Discovery Center for Science & Earth History	Glen Rose Crosbyton Dallas ※ Eureka Springs から移転 Dallas ※ 母体組織は 1972-	1984- 1998- 2011 - 閉館 ※ 母体組織は 1972-	化石発掘地である Mt. Blanco の考古学系博物館。地元出身のアンドレイ・チチナーは美大に学び、化石復元の技術を学ぶことで古生物学の世界へ入り創造論の立場で活動している。 Eureka Springs のものが福音派教育の専門学校 CFNI 内へ移転。現在は閉鎖されているが、次項の施設に転身か。 2019 年 9 月 2 日ダラス市内に開館。他の創造博物館ではあまり見られない恐竜 (鳥?) 人間の展示がある。

図2：アメリカ合衆国の天地創造博物館分布図（筆者作成、2023年1月）



兵器化する科学主義（小森）



図3：ヒトや魚と恐竜が同時代に共存する聖書的世界観を示すエントランスホールの展示。ロボットやレプリカを生物展示と併用する設計は、ユニバーサルスタジオなどを手掛けたテーマパーク展示の専門家によるもの（筆者撮影、2011年2月）

り、実際のところ天地創造博物館ではこれらを部分的に組み合わせたものが多い。

ミュージアムは、こうした文脈で活用され始めた対抗の戦術であり、特にホームスクーリング（家庭での教育）と併用する教材として普及したと思われる。既に見た通り、公立学校教育の現場では、それまでは比較的实力のあった授業時間均等の主張や教科書運動が次第に法的に制限され始めた。その結果、公立学校と比べて思想・信仰の面で融通がきくホームスクーリングが、一九八〇年代を通じて福音派キリスト教者の間で一種の流行を見せたのである。教育改革者ジョン・ホルト（John Holt）による推進も後押しし、一九八〇年代を通じては二〇の州で、さらに一九九三年には全五〇州で、ホームスクーリングは合法化した。^⑤

進化と創造は「説」として並列なのだ、という主張において肝心なのは、進化論科学の領域で存在するものが、創造科学にも外形的に存在することである。天地創造科学の博物館は、それ自体が証拠を示すための道具となる。ホームスクーラー向けの教科書が出版され、それを用いる予備校や専門学校も作られている。創造科学の主張にとっては、対称的な構造が重要なのである。

また一方で、ミュージアムは、公立学校で天地創造科学

教育が制限されたあと、公教育を受ける生徒たちに影響力を持つための重要な手段となっている。ID 説などの形であっても法的に制限され始めたために、公立学校のスクールトリップで天地創造科学博物館へ学びに来ることが増えた。ホームスクーラーであれば来館に法的な問題はないが、公教育の一環として実施される場合、違法行為の疑いがあるとして問題視されている。

さらに情報の信憑性の観点から言えば、ミュージアム展示は学校教育の副教材を超えた位置づけにある。アメリカにおいてミュージアムは「高校や大学の授業・教師」や「テレビ」や「インターネット」を遥かに超えて、歴史や科学の知識に関する信頼性を有している。すなわち、一般的に見ればミュージアム展示はより「真実」を支えているメディアなのである。二〇二〇年の統計ではさらにその傾向が高まり、その要因にはパンデミックでデジタル情報に依存するようになった環境要因が指摘されているが、コロナや大統領選に関連した陰謀論が一層普及し、信じるべき拠り所が揺らいでいると推察される。

三 ケンタッキー州ピーターズバーグのクリエイション・ミュージアム

（1）経営的手法と成功

クリエイション・ミュージアム（Creation Museum）は、天地創造論の教育機関アンサーズ・イン・ジェネシス・ミニストリー（Answers in Genesis Ministry, 以下「AiG」とする）を母体とし、近年最も成功した創造博物館である。本章では同館を例にその戦術について考察したい。

「創世記に回答がある」という組織名の通り、彼らは創造論者のなかでも極めて保守的な立場を採り、聖書の無謬性を説く「若い地球説」を支持する。館長のケン・ハム（Ken Ham）は、博物館も運営する創造論の教育機関「創造研究所（The Institute for Creation Research）」での勤務を経て、一九九四年にAiGを創設し、二〇〇一年には博物館建設計画を公にした。建設地には、シンシナティのダウンタウンから車で西に四〇分程度離れたケンタッキー州最北端の土地が選ばれた（図4）。畑や山道に囲まれて、周囲には大きな商業施設もない立地にもかかわらず、二〇〇七年の開館から三年間で一〇〇万人の来館者数を記録しており、クリエイション・ミュージアムは開館当初より経営上成功を収めてきた。¹⁹⁾

立地の選択には経営的な視点が重視された。「シャルトン地所」と名付けられたこの地を選んだ理由について館長は、ハイウェイに近いことや観光施設に最適な自然環境があることに加えて、「アメリカ人総人口の六九%が一時間以内のフライトで訪れられる場所」を選んだと説明する。当初より全米規模での集客を前提とし、経営を明確に見据えた戦略的な立地選択だったのである。²⁰⁾

さらに博物館から四マイル程南東に広大な敷地を購入し、二〇一六年六月には「原寸大」とされるノアの方舟型テーマパーク「方舟との遭遇（Ark Encounter）」を開館した。二〇一七―一八年の旅行シーズンには来園者が二〇〇〇万人規模を数えており、こちらも経営は順調のようである。二〇二二年一月の報道によれば、テキサスへ移転したトヨタ米本社の跡地をミュージアムの近くに購入しており、今後はこの土地に小中学校を設立するという。四五〇〜五〇〇名の一二年制の学校はアンサーズ・アカデミーという名前になる予定だ。事業経営は成功し続けていると言って良いだろう（図5）。²¹⁾

（2）両論併記と進化論批判…対称性を志向する創造科学
巧みな経営でAiGが多くの来館者へ届けた展示のメッセージはどのようなものだったのだろうか。以下では、展

図4：クリエーション・ミュージアム周辺地図 (Kentucky 2010 を元に筆者作成)



図5：「方舟との遭遇」テーマパーク全景（筆者撮影、2017年7月）



示に見られる論法を精査し、第一章で確認した創造科学の「両論併記」戦術がいかに応用されているのかを見ていこう。展示室に入るとまず、化石の発掘現場や聖書の時代考証が解説される。続く創世記のセクションの前に「出発点の部屋 (Starting Points Room)」という展示室がある。ここでは進化論科学と創造科学を比較して、人間による根拠 (human reason) を利用した進化論と「神の言葉 (God's word)」に基づいた創造科学では考え方の出発点が異なるのだから説明の仕方がこのように異なるのだ、と説明がなされる (図6)。動植物、猿とヒトの関係、鉱石、化石など、万物の仕組みに対して二通りの説明が与えられる。そして、展示室出口で二人の子供の人形が言う——「学

校じゃあこんなこと今まで聞いたこともなかった」（図7）。さあ、どちらを信じるのだ、と問いかけられるのである。二つの「科学」をわざわざ比較して見せつつも、ここではまだ進化論を全く批判せず、単に進化論という「仮説」に対して、創造論もまた「仮説」であるとして並列する。先に確認したものと同様に、創造論が進化論科学に対してまた別の理論だと主張する創造科学の論法は、展示でも用いられている。

その上で、別室の展示では進化論に対する創造科学の「正しさ」が「科学」的に主張される。まず、ダーウィンによる「進化」と「自然淘汰」の概念を解説し、進化論者が両概念について理解しておらず混同していると主張する。自然淘汰の説明にはこうある。目が見えなかったり耳が聴こえなかったりする、突然変異の生物は早々に死ぬ宿命にあり、これはそれ以外の生き物たちが生存するために必要なプロセスである。そして、それらの「犠牲」とは、樂園追放の後の罪に呪われた時代の生物の特徴であり、こうしたメカニズムを用いて神は創造した万物の手入れをしているだけであって、「自然淘汰」はなんら新しい遺伝子（種）を生み出すものではない。こう結論づけられる。つまり、自然淘汰と進化によって種が多様化するという説、すなわち、生物学における進化論は誤りであるというのである。

展示はこのように、まず両「論」を比較した上で、次に進化論を激しく批判する構成をとる。第一に両論が同格の理論であることを示し、第二に創造科学の「正しさ」を主張・保証するという展示の構成に見られる特徴は、創造科学の論法と同様のものである。

また、こうした両「論」併記の方法はクリエーション・ミュージアム自体の正しさを主張する際にも使われる。つまり、「科学博物館」としての正統性を根拠にその科学的な正しさが主張されるのである。二〇一二年七月に起こった、ある「事件」についての館長の見解にそのことが窺える²⁴。同館公式ブログで館長は、スミソニアン施設のパンフレットに、クリエーション・ミュージアムの恐竜の写真が使われていることが発覚したと伝えている。右手に掲載されている地図には、ワシントンDCのスミソニアンのナショナル・モールが見える。左手下にあるティラノサウルス・レックスの写真がクリエーション・ミュージアムの公式サイトのものとされる（図8）。ここで興味深いのはハム館長の語りである。

世俗主義者たちは、あけすけに、それも頻繁にクリエーション・ミュージアムを模倣している。（…）この博物館の彫刻家兼デザイナー「引用者注…恐竜の展示を作った人物」は、高度に専門的で、高度に科学的な、

兵器化する科学主義（小森）

極めて優れた仕事をしている。⁽²⁶⁾

権威あるスミソニアンが模倣するほど、クリエーション・ミュージアムは「専門的」で「科学的」だ、だから正しい。このような論理で同館の真正性を主張する。つまり、スミソニアン協会がクリエーション・ミュージアムを「真正な科学博物館」として認めているという主張である。館長は進化論の科学博物館と比較しながら、「（無益にも）彼らは〔引用訳者注…クリエーション・ミュージアムの〕専門的で高品質な施設に疑いをかけている。世俗主義者の多くは、スミソニアンのような『本物』とされる博物館と比較して『似非』博物館だと決めつけている」と述べる。ハム館長は、この写真が引用された一件を以て、進化論者側が創造科学博物館を模倣していると主張する。しかし、進化論の科学博物館一般で創造博物館を模倣しているという事実は確認できない。もちろん、創造科学を説として支持することにはありえない。館長はその主張の根拠をその他の具体例で示すこともない。このブログでの発言にも展示内での主張と同様の論理が見られる。

このように、クリエーション・ミュージアムは一貫して、両者は同格であり、対称的な構造にあることを強調した上で、創造論が正しいと主張する。こうした論法を用いて、「科学博物館」としての正当性を巧みに装うのである。

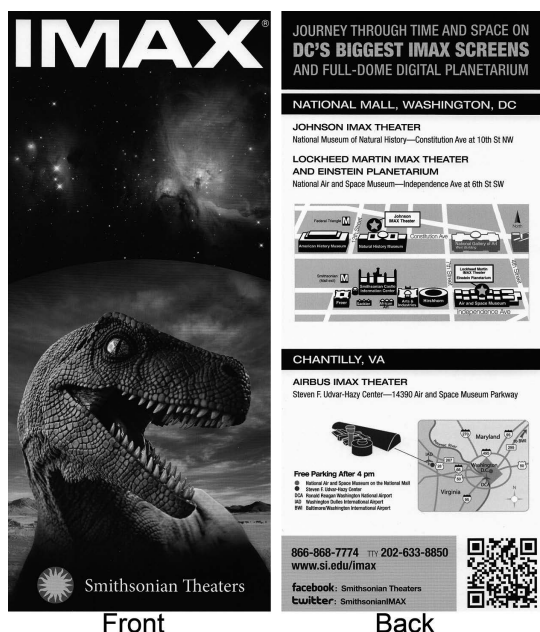


図 8：クリエーション・ミュージアムの写真を使用したとされるスミソニアン科学博物館のパンフレット (Ham 2012)

創造博物館が、創造論と進化論の二つの「科学博物館」を「同格」と前提するためには、科学博物館一般の流行に乗って様式を模倣することが重要である。それによって、進化論の博物館と自分たちは対称的な地位にあり、また彼らに模倣されるほど正統な「科学博物館」だと主張することができからである。クリエーション・ミュージアムが他の創造博物館の追隨を許さない立派なディスプレイや大きな規模を備えた施設である理由は、こうした科学博物館としての根拠づけのためであろう。仮に、一切の情報がなく立場も中立な状態で創造科学側の展示だけを見れば、一見すると両者の間には「論争」が成立しているように見えるかもしれない。だが実際には、展示内容にあるような論争は交わされていない。ミュージアム研究者のシャロン・マクドナルドが指摘したように、天地創造博物館に対して進化論者から「科学論争」としての応答は存在しない⁽²⁷⁾。ここに対称性は存在しないのである。

創造科学が発明した対称性の主張は、クリエーション・ミュージアムにおいて戦術として更に高度なものとなった。そのことを示す一例が二〇一四年二月に公開されたハムと進化論の教育者であるビル・ナイ (Bill Nye) 氏のダイベートである。討論のテーマは「創造論は、起源についての説明に利用できるモデルなのか? (Is Creation A

Viable Model of Origins?)」であった。司会にはCNNのトム・フォアマンを迎え、約三時間もの長丁場で二人が討議する模様が、YouTubeのオンラインストリーミングを通じてライブ配信された。

ビル・ナイ氏は、一九九〇年代のテレビ番組「科学の男ビル・ナイ (Bill Nye The Science Guy)」でよく知られた、進化論科学の教育普及をテーマに活躍する文化人である。討議ではたびたび「愛国主義者」であることを強調し、一貫して、「アメリカ市民、アメリカ国民として科学を守ろう」と主張をした⁽²⁸⁾。個別の質問への基本的な話の流れは既に決まっていたのではないかという印象を与える、予定調和な議論が展開した。両者からのプレゼンテーションおよび質疑応答では、個別の議論が語られつつも繰り返し「実現可能、対、不可能」という同じ結論に達した⁽²⁹⁾。

AIGがこのダイベートを開いた目的は何か。対称性論法で創造科学の正統性を主張することであろうか。それだけではないと思われる。科学教育で有名な人物を招いたイベントを開くことによって、クリエーション・ミュージアムの宣伝効果を期待してのことだったと考えられないだろうか。イベントのライブ閲覧は、オンラインチケット制で各州からのアクセスで即時完売、さらに、その際に既に討議の様子を収めたDVDの予約まで受け付け、書籍版との

セット販売なども各種取り揃えるという、ビジネス的に周到なものであった。筆者もフェイスブックの広告でこのイベントについて知ったが、広告も多く打たれていたと予想される。一大イベントショーの趣である。積極的なメディア戦略の甲斐あって、YouTubeでの視聴数は八〇万を超えた。また、一万を超える教会、高校や大学でパブリックビューイングがおこなわれたという。^{③②}キリスト教系新聞だけでなく、地方紙、全国紙と各種メディアに次々と取り上げられたこのイベントが、博物館にとつて強い宣伝効果を持ったのは間違いないだろう（図9）。

それは何のための宣伝だったのか。誰から誰に向けられたものだったか。驚くべきことに、このイベントの後わずか二〇日あまりで、税金面での問題や資金繰りの課題で建設が凍結されていた「実寸大」ノアの方舟型テーマパークの建設運営費用への大口献金がなされた。このイベントは、クリエイション・ミュージアムの側から創造論者コミュニティに向けて、絶大なる宣伝効果を持ったのである。ディベートの「勝利」は、一対九という大勢でビル・ナイの手に落ちたなどトリベラル系メディアは報じたが、経済効果という点ではクリエイション・ミュージアムの大勝であった。^{③③}

ハム氏はこのディベートの後に出した公式見解のなか

で、ビル・ナイ氏がリチャード・ドーキンスのように交流を拒絶せず、創造論との公式の意見交換をおこなっているという点を讃えている。この賞賛は、進化論者は我々創造論者と民主的な対話の場を持たない、という主張とセットになったものである。ハム氏は、「引用者注…一般的な進化論者は」この「引用者注…創造論対進化論の」問題について批判的に分析する機会を人々に与えたくないのだ」として、あたかもこれまで対話の場がなく、それは進化論者に非があるかのように印象づけて、彼らの対話姿勢を非難する。^{③④}第一章で見た通り、実際には、創造論反対派は言論の自由や公教育における信仰の問題として創造論者たちと対話を交わし批判してきた。多くの進化論科学者は、創造論者との科学論争に乗ることで、実際の論争が存在すると公に印象づけ、結果的には創造論側にとつての宣伝になるということを知っている。だからこそ、一般的には両者の間に「科学論争」が起こらないのである。

他方で、ビル・ナイ氏はもちろんミュージアム公式のDVDにも出演しているし、彼自身もこのディベートについての書籍を発表している。^{③⑤}勝利の榮譽を手にし、「科学の男」のパブリシティと同時に、次回作のための取材ともなるイベントだったということができる。この点に関するナイ氏の公式見解は発表されていないが、彼はクリエイシ

図9：ナイ＝ハム・ディベートの広告。テレビやYouTube でインターネット中継され、博物館公式 DVD としても発売された。一方ビル・ナイ側も、方舟パーク開館時に撮影されたナイ来館ツアーの様子等も含めたドキュメンタリー番組を制作しており、DVD や Netflix 配信などで公開された（Bill Nye 2017）



ョン・ミュージアム側といわゆるウインウインな関係で結びついてはいないだろうか。

これまでも「二つの科学は対称的である」という主張は、ほとんどの進化論者には微塵も通用していないと見るのが妥当であろう。ならば、この「対称性」の主張は、正統な進化論者を公式に巻き込めば巻き込むほど、創造論内部の信仰コミュニティにとっては「科学的権威」の保証となる。一方で、それが説得力を持って世論に普及したかどうかという点で判断された議論自体の「勝ち負け」は、本質的にはクリエーション・ミュージアムの目的に関わらない。これは「目的」ではなく「手段」だったのである。チケットや物品の販売数が伸び、凍結されていた次の事業を実現する多額の寄付金が集まったことが、館長ハム氏にとって何よりの「勝利」であろう。

四 メディアの語りが支える両論併記

二つの「科学」が並列であると主張する対称性の戦術は、世間に名の知れた進化論者を直接呼んで「対話」の公開イベントを実施するなど、非常に洗練されたものとなっている。

こうした戦術に見られるようなクリエーション・ミュー

ジアムの主張はどのように受け止められ、語られてきたのだろうか。報道機関によるニュースメディアの反応について短くまとめると、リベラル色の強い全米規模のメディアには懐疑的に受け止められ、キリスト教系や保守系メディアには、批判的見解を避けつつ事実報告的に紹介されてきたと言う事ができる。ここで注目したいのは、保守系メディアの言論もまた、創造科学の戦術と相似形であるという点である。つまり、両論併記によって対称性を主張し、その実在感を社会に伝えるという方法をとっている。これについて見ていこう。

レトリックに着目してニュースメディアを見ると、リベラル／保守というイデオロギーによってその特徴に違いが見られる。まず全国紙 *New York Times* や古参の地方紙 *The Cincinnati Enquirer* など^⑧、リベラル派、批判的な立場からの語りは、創造科学の非科学性、クリエーション・ミュージアムにおける展示やケン・ハムら創造論者の主張、税金や雇用面など館の組織の経営上の問題などを取り上げて、徹底的に批判する。時折、進化論者からの見識を述べて批判することもあるが、そのほとんどは、「この地球は作られて六〇〇〇年」「恐竜を含めて『墮落』以前はすべての生き物は憎みあわず草食動物だった」といった創造論の主張を取り上げて馬鹿馬鹿しいと言わんばかりの

厳しい表現で切り捨てるような論調である。これらの議論は端から創造科学を「科学論」として考えていないことを反映しているよう。その表現の例としては、クリエーション・ミュージアムのことを「ケンタッキーのディストピア (Dystopia in Kentucky)」や「創造論者のデイズニランド (Dystopia in Kentucky)」^⑨や「創造論者のデイズニランド (Creationist Disneyland)」^⑩「ジュラシック・パーク (Jurassic Park II ジュラ紀の悪ふざけ)」と名付け、「クリエーション・ミュージアムはミュージアムではなくて、地獄に落ちるぞ!」と脅す型の説教の3D版に、フードコートを付けたもの^⑪などと揶揄する。これらの記事には、大げさな表現でその異常性を強調するというレトリック上の特徴がある。記者にとって、ケン・ハム氏は「三五〇万ドルの博物館の背後で動くボーンアゲインしたバーナム」である^⑫。

これと対照的に、創造論を支持する保守的な立場の語りは、声高に叫ばず穏やかなものである。淡々と「そこでは科学論争がおこなわれるのだ」とか「アメリカでは過去には信仰心が高かったが、現在では問題ばかり起こっている」ので、クリエーション・ミュージアムやケン・ハムは聖書教育の必要性を訴えている」と、落ち着いた口調で語りかける。これは、より「客観的」な報道であり信頼するに足るということを読み手に印象づける事ができ、レトリック

のトーンは戦術として用いられていると理解することができ。その内容は、クリエーション・ミュージアムの主張を「科学論」の枠組みとして伝える。つまり、創造科学を「科学」と前提している。一方、進化論の立場からの批判を両論併記することとは、創造論が科学的に妥当である可能性を前提としたもので、「可能性のある説」であるという事が世間に流布される。保守系のメディアはこうした支持の形をとるが、この方法もまた対称性の戦術として見てきたものと同形の論理である。

具体例を示してみよう。大手キリスト教系新聞である *Christian Post* は次のように伝えている。「アメリカはかつて神の御言葉の土台の上に立っていた。しかし土台は脆くも崩れ去った——教会においてさえ——人間の言葉に取って代わられている。ある護教論者〔引用者注…ハムのこと〕はこう述べる。」「この若い地球論者〔引用者注…ハムのこと〕は、現在のアメリカとキリスト教が、どの地点にいるのかを総説する一時間のスピーチをおこない、アメリカはもはやキリスト教国ではないというオバマ大統領のよく知られたスローガンを引用した——それは、オバマの一般教書演説 (State of the Union) のたった数週間後のことであった⁽⁴⁰⁾」と、オバマとハムを並列した上でこう伝える。「我々アメリカは、かつていかなる存在であったのだ

としても、もはや、そのようなものではない。我々は変わってしまったのだ」と、火曜日に開かれた、二度目の『この国の形 (State of the Nation)』演説で、アンサーズ・イン・ジェネシスの代表ケン・ハムはこのように述べた⁽⁴¹⁾。ミュージアム側の主張をありのまま報道しながら、ここでは科学ではなく政治的権威と並べる編集によってその偉大さを暗に示す、といった方法をとる。ここにも、先のミュージアムの展示で確認した「両論併記」による自己の権威付けのレトリックが見える。

また別の例として、ビル・ナイとケン・ハムの討論会を保守系のメディアがどう伝えたかを見てみよう。

その情熱と快活なキャラクターに違わず、「科学の男」ビル・ナイは壇上に上がり、手を降り、地球は「うん十億年」にもおよぶ年月を経ているのだと述べた。この星の年齢がたった六千年だと教えていることで知られるケンタッキー州のミュージアムでおこなわれた討論会においてのことである。クリエーション・ミュージアムの創設者ケン・ハムと討論し、ナイは例の心地よい口調で——一九九〇年代、彼を「科学の男ビル・ナイ」のホストとして、ポップアイコンにのし上げた——科学について伝えた⁽⁴²⁾。

保守系の代表的な報道機関である FOX ニュースは、ナ

イ氏をこのように紹介し、イベントの趣旨を「このイベントは信仰と科学について、古くから問われ続けた『いかにして我々はここまで到達したのか？』という問いを掘り下げる目的でおこなわれた」とまとめているのだが、そこには先に筆者がイベントは宣伝のためではないかと批判したような、その目的自体について疑問視する意見は挟まれない。あくまで、ミュージアム側の主張をそのまま報じる形をとる。

次いで、ハム氏は聖書の物語を信じ、ナイ氏は「多くの科学者同様に」世界の六千年説には根拠がないという立場をとるのだとし、両者の主張や説明を交互に順々に伝えていく。この「そのまま伝える」という報じ方自体が、両論併記をして実在感を社会で高める対称性の語りとなっている。「〔引用者注・原子や物質はどこからきたのかと観客に質問されて〕ナイ氏は、科学者はいまだに答えを探し続けている」と述べる。ハムは、既に私はその答えがあるというのだ」と記される^④。このように対称性が強調される。

さらに、この議論の前提条件それ自体に問題がある、といった類の批判を先立ってかわすように、議題やミュージアムの用意した討議の場が正当なものだという強調がなされる。現場の雰囲気について、「折に触れて、ディベートでは大学における講義のような感覚を覚えた。スライドを

使って長時間の報告のようなものもおこなわれた」と記事は説明している^⑤。アカデミックで正式なものだという印象を与えようとしているのである。実際には、このイベントはクリエーション・ミュージアムが周到に準備したもので、そこに呼ばれたのは、科学社会学者や古生物学者ではなく科学教育の文化人である。また会場には支持者のみが集まり、インターネット上で同時公開され、かつそれが商品として売られているという科学的な論争の場としては極めて特殊な状況である。論争の「勝敗」が学術的な判断以外の要素で決まるようなもののだとしても、ここでの討議の条件は、「科学的」で公正なものであるかのようにミュージアムは装い、本記事はそれを強化している。

五 対称性の博物館戦術と文化戦争

天地創造博物館とは、「科学主義／科学論争」を捏造して戦術的に利用する装置であった。たしかにカープーブンティンクスが「戦術的博物館」論として主張したように、戦術的に利用すればミュージアムは社会的弱者が異議を申し立てる道具として力を発揮し、社会運動におけるその有効性を評価する事ができよう^⑥。だがその一方で、レプリカのみで科学博物館の展示が成立するように、モノ性が後景

化した近年のミュージアムの状況では、「科学性」が極めて恣意的に構成される虞もある。本研究が展示を巡るコミュニケーションに見たのはこうした状況である。

科学知識論者のブルーノ・ラトウールは、科学に「近代」の力学を見て、近代以降の科学研究が真理を提示する手続きを批判して「近代科学」の相対化を試みた^⑧。科学技術を基盤とする「近代社会」と基盤としない「非近代社会」との間の線引きが、「近代科学」の側によって引かれるのであれば、その非対称性を生み出す力学が近代科学にある。このように論じ、科学は「対称性」を軸に再構築されるべきであると主張した^⑨。しかし天地創造科学に見られたように、こうした科学に関する相対主義の主張は、戦術として盗用 (appropriation) される虞があるのだ^⑩。文化戦争状態においては、様々な方法で恣意的に「科学」が定義され、「対称性」という論理が盗用される^⑪。カーブブルーペンティンクスとラトウールに倣えば、天地創造博物館は「対称性の博物館戦術」を巧みに「進化」させているのである。

結論

本研究ではクリエーション・ミュージアムを事例に、同館の展示や関係者の語りからその言論の構造について考察

した。ここでは、「創造論」と「進化論」の二つの科学の対称性を強調することで、創造論を科学として権威づける語りが見られた。

一九九〇年代頭著になった多元論的「文化戦争」状態で、科学知識に関する言論もまた社会で相対化されており、両論併記の戦術はこの状況で機能している。他方で、創造博物館に関する報道を見れば、「リベラル」と「保守」と二元的に分ける語りが多数を占め、特に保守系メディアでは二つの「説」が並置されている。これらは結果的に、同館が提供する「対称性」の図式を強化することによって、天地創造科学の科学性の正当化に加担している。

真実を巡るコミュニケーションとは、理想的には複数の「真実」の平和的共存を目指すべきものであるう。しかし現実には、相対化の言論が盗用され、「真実の複数性」は健全なコミュニケーションのふりをして、他者の真実を否定する手段となっている。すなわち、天地創造科学博物館とは、社会に両科学間の「対話」が実在することを演出・構成する「対称性の博物館戦術」である。ミュージアムは——その公共的な理念や常識に反して——「真実」の構成にまつわる捏造の暴力装置として機能する危険性があるのだ。科学主義と公教育の交差点において、ミュージアムは「兵器化した言論」の一翼を担っていた。戦術として使わ

兵器化する科学主義（小森）

れたとき言論は、コミュニケーションを阻害し民主的な「公共」の醸成を妨げるものとなるのである。

討議箇所資料

図1：「天地創造の根拠の博物館（Creation Evidence Museum）」足跡の化石展示。人間と恐竜が同時代に存在していたと解説されている（著者撮影、二〇一一年二月）

図2：高圧生物圏の「再現」によってノアの洪水や原罪以前の無害化された生物の状態の証明を試みる実験装置（著者撮影、二〇一一年二月）

図版資料一覧

Bill Nye: *Science Guy*, dir. by David Alvarado and Jason Susberg, PBS/Netflix, 2017（邦題『ビル・ナイー科学の伝道師』）

Ham, Ken. “Young Girl Discovers: Smithsonian Is Using a Creation Museum Dinosaur.” *Around the World with Ken Ham*, July 7, 2012.

Kentucky Blue Bell, PA: Universal Map, 2010.

註

(1) より網羅的な研究一覧は、拙論「アメリカ合衆国における創造博物館の科学・娯楽・政治学—ケンタッキー州ピーターズバーグの Creation Museum」（『博物館學雑誌』三八（二）、全日本博物館学会、二〇一三年、四七—七二）にまとめたが、科学主義の戦術として脈づけて理解するには Eugene C. Scott, *Evolution vs. Creationism: An Introduction* (University of California Press, 2004／邦訳『聖書と科学のカルチャー・ウォー—概説 アメリカの「創造vs生物進化」論争』)の第二部を参照されたい。

(2) ダーウィンの記述では一八五六年の手紙に初出する。この時は小文字で、一八六三年には大文字で“Creationist”と綴っている。Charles Darwin, “Darwin, C. R. to Gray, Asa, May 31, 1863” (*Darwin Correspondence Project*, Cambridge, UK: Cambridge University Library, Letter 4196); Charles Darwin, “Darwin, C. R. to Hooker, J. D., July 5, 1856” (*Darwin Correspondence Project*, Cambridge, UK: Cambridge University Library, Letter 1919).

(3) この事件は舞台、映画やテレビドラマ、小説や漫画、果ては音楽の題材になるほど知られているが、その知名度に最も貢献したのはジェローム・ローレンス (Jerome Laurence) らによる一九五五年の演劇『風の遺産 (Inherit the Wind／聖書への反逆)』とスタンリー・クレイマー (Stanley Kramer) による一九六〇年の映画版であろう。その後繰り返しテレビ映画でも取り上げられる定番ものとなった。ブルース・スプリングスティーン (Bruce

Springsteen) は一九八八年の“Part Man, Part Monkey”で本事件について歌っている。

- (4) “separation of church and state”の定訳は「政教分離」が通用しているが、森によれば、合衆国憲法修正第一条を基礎とする理解においては、「政治における宗教的次元」を全く禁止しない。アメリカ合衆国は建国に際し、宗教的不寛容への反省から「国教樹立」を憲法に明示した初の国家であり、その歴史に立てば日本語では「政治と宗教の分離 (separation of politics and religion)」ではなく「教会と国家の分離 (separation of church and state)」と区別すべきである。森孝一『宗教からよむ「アメリカ」』(講談社、一九九六年) 三四―五二。
- (5) 鶴浦裕『進化論を拒む人々―現代カリフォルニアの創造論運動』(勁草書房、一九九七年)、一―三六。
- (6) 前掲書。
- (7) 「若い地球説」は創造に関する解釈の立場で、最も誤謬論的で極端なもの。聖書の記述は文字通りの事実で、世界は一日を二四時間として六日間で創造され、創造からキリスト生誕までの期間は約四〇〇〇年であり、つまり現在は創世後約六〇〇〇年とされる。そのほかの理論とは異なっている地球はまだ「若い」と理解される。Robert T. Pennock, *Tower of Babel: The Evidence Against the New Creationism* (Cambridge: MIT press, 2000), 216.
- (8) Mano Singham, *God vs. Darwin: The War Between Evolution and Creationism in the Classroom* (Ilanham, MD: Rowan & Littlefield, 2009), 93-141.
- (9) Clark Dorman, “McJann v. Arkansas Board of Education,”

The Talk Origins Archive: Exploring the Creation/ Evolution Controversy, 1996; 森前掲書、一八四。

- (10) Scott, *ibid.*, 113-133.
- (11) 一九七〇年ダラス郊外で設立されたクライスト・フォー・ザ・ネーション (Christ for the Nation Institute, CFNI)、一九九三年にサンディエゴ郊外に始まった研究・高等教育機関「創造研究所」、ヴァージニア州パーセルヴィルに二〇〇〇年に設立されたパトリック・ヘンリー大学 (Patrick Henry College) など。CFNI は、二〇〇七年に国際キリスト教認可協会 (International Christian Accrediting Association, ICAA) によって認可されたが、ICAA 自体はアメリカ合衆国教育省から認可された団体ではない。ICR とパトリック・ヘンリー大学は、共に ICR 関連団体によって認可された教育機関である。
- (12) 調査値は市民権や永住権を持たない合衆国居住者を含む。Megan Brennan, “40% of Americans Believe in Creationism” *Gallup*, July 26, 2019.
- (13) United States Census Bureau, “Annual Population Estimates, Estimated Components of Resident Population Change, and Rates of the Components of Resident Population Change for the United States, States, and Puerto Rico: April 1, 2010 to July 1, 2019”
- (14) 二〇一〇年から二〇一九年までの変化も確認すると、創造論の立場は四〇%から四六%へと増えたのち四割前後に落ち着いている。進化論は一六%から一九%、二二%と漸増傾向にある。有神論的進化は「三八%から増減」のち

兵器化する科学主義（小森）

- 三三％に。Brenan, *ibid.*
- (15) 図表4・5はまず二〇一二年一月現在までの筆者の調査に基づいて作成され、その後、断続的に追加修正を加えてきた。建設予定のものも含む。必ずしも展示教育を中心としたものだけではなく、学校や研究所の付随展示室の類も多い。
- (16) 合衆国政府試算で二〇一二年には一八〇万人の学生がホームスクーリングを選び、一九九九年の八五万人から急増を見せた。このうち児童年齢に当たる値は一・七％から三・四％へと増加したと考えられている。その理由には、二〇一二年の集計で「宗教的な教育を行いたいため」が六四％、「道徳的な教育を行いたいため」が七七％とされる。National Center for Educational Statistics, “Parent and Family Involvement in Education, From the National Household Education Surveys Program of 2012.”, United States Department of Education. “Statistics About Nonpublic Education in the United States.”
- (17) Roy Rosenzweig and David Thelen, *The Presence of the Past: Popular Uses of History in American Life* (Columbia University Press, 1998); John Dichtl, “Most Trust Museums as Sources of Historical Information,” American Association for State and Local History.
- (18) 代表のケン・ホーム氏は、オーストラリアにあった創造論および創造科学教育機関「創造科学協会」(Creation Science Association, CSA)「一九七七年設立。後に「創造科学基金」(Creation Science Foundation)」と改名)に勤務した後、創造研究所での勤務を経て、一九九四年 CSA のアメリカ合衆国支局としてアンサーズ・イン・ジェネシスを組織した。彼は、独立した理由を、創造科学協会の創設者カール・ウィーランド (Carl Wieland) との「思想および運営上の違い (differences in philosophy and operation)」と説明している。その後 CSA はその後 AiG に併合され、アンサーズ・イン・ジェネシスの名前を冠した支局をカナダ、ニュージーランド、南アフリカおよびイギリスなど各国に開いた。Ronald L. Numbers, *The Creationists: From Scientific Creationism to Intelligent Design* [Expanded Edition] (Cambridge: Harvard University Press, 2006).
- (19) 館の公式発表によると開館から約三年後の二〇一〇年四月二六日に来館者数一〇〇万人を超えた。動員数を他館と比較すると、二〇一〇年の値で、スミソニアン航空宇宙博物館が八二〇万人、ドイツニアランド (アナハイム) が一五九〇万人、ユニバーサルスタジオ (ハリウッド) が五二〇万人であり、新興の展示施設の観光事業としては大きな成功である。ワシントン DC に聖書博物館が二〇一七年開館したが、聖書や創造論をテーマにした大規模娯楽施設は当時存在しなかった。Creation Museum, “Millionth Guest Visits Creation Museum,” Answers in Genesis, April 26, 2010.
- (20) Paul Sheehan, “Onward the New Christian Soldier,” *The Sydney Morning Herald*, January 17, 2005; Jim Meyer, “Wag the God: Looking for Easy Answers at the Creation Museum,” *Grist*, February 22, 2013.
- (21) Answers in Genesis, *The Creation Museum Behind the Scenes!* (Hebron, KY: Answers in Genesis, 2007), 8.

- (22) Andy Brownfield, "Answers in Genesis, group behind Creation Museum, Ark Encounter, buys former Toyota HQ for \$31 million," *Business Courier*, November, 18, 2022.
- (23) 建設前の事情は以下を参。 Andrew Wolfson, "Would You Visit Ark Park?" *The Kentucky Journal*, January 17, 2011.
- (24) Ken Ham, "Young Girl Discovers: Smithsonian Is Using a Creation Museum Dinosaur!" *Around the World with Ken Ham*, July 7, 2012.
- (25) "Biblical Museum Ad Campaign Features Dinosaurs," *The Kentucky Post*, June 13, 2012.
- (26) 時に批判的な取り上げ方は確認できる。例えば、二〇〇九年には、アメリカ自然史博物館を中心に、ダーウィン生誕二〇〇周年・『種の起源』出版一五〇周年記念展の「ダーウィン」展が各地で開催された。そこでは創造科学への「応答」というセクションで、「人間という存在の精神的な探究」と「物質世界の科学的調査」の両者はなんら関係しないし自然淘汰に基づく進化論は未だにいかなる理論にも批判されていない、として創造科学の非科学性を強調している。展覧会のウェブサイトは既に閉鎖されている。
- (27) Sharon MacDonald, "Introduction" *A Companion to Museum Studies*, edited by Sharon MacDonald, Hoboken, NJ: Wiley-Routledge, 2010).
- (28) その一方で、ハム氏は「聖書・神・キリスト教原理主義」は、時間・空間を超越する普遍性を持つべきなのだを主張をする。しかし、ナイ氏はこの主張に潜む、地域主義やアメリカという国優先の考えや資本主義を批判しない。両者は同じ土俵に乗っており、この点でも討議は「論争ではなくシヨウ」に見える。
- (29) 全てのスクリーン起りは以下のウェブサイトからの筆者による翻訳である。 Bill Chappell, "Who Won the Creation vs Evolution Debate," *NPR*, Feb 6, 2014.
- (30) Stoyan Zaimov, "Bill Nye, Ken Ham Creationism Debate Preview: Mass Media Coverage Surrounding Event," *Christian Post*, February 4, 2014.
- (31) 「勝利」報道に参。 Bill Chappell, "Who Won the Creation vs Evolution Debate," *NPR*, Feb 6, 2014.
- (32) Ken Ham, "Bill Nye and I Have Different Accounts of Our Debate," *Answers in Genesis*, April 16, 2014.
- (33) Jeffery Del Viscio, "A Fight for the Young Creationist Mind," *The New York Times*, November 3, 2014.
- (34) ノアの方舟テーマパークオープン時の二〇一六年七月七日には、ミュージアムとテーマパークの双方で「ナイによる批判コメントラリーイベント」が開かれ、そのドキュメンタリーが制作された。二〇一七年三月一三日にPBSにて「ナイ・ハム・セカンドディベート」としてブレイクされた。 Contrera Jessica, "Bill Nye Visited a Noah's Ark He Doesn't Believe Should Exist," *Washington Post*, July 10, 2016; 「キエメンタリーはこの記事で閲覧可能」 Anonymous, "Watch Ken Ham and Bill Nye Tour 'The Ark Encounter' and Intensely Debate Along the Way," *Relevant*, April 19, 2018.
- (35) George Packer, "Dystopia in Kentucky," *The New Yorker*,

- August 12, 2008.
- (36) Peter Slevin, "A Monument to Creation," *The Washington Post*, Sunday, May 27, 2007.
- (37) The Thinking Atheist, "Atheists at the Creation Museum," YouTube video, 8:47, June 22, 2013.
- (38) "The Creation Museum is not a museum so much as it is a 3-D hellfire sermon with a food court" 「地獄に落ちるぞー型の説法」とは展示終盤にあるクルンウスを応用したヤンシエンのロビーである。Jeffrey Goldberg, "Were There Dinosaurs on Noah's Ark?" *The Atlantic*, October 2014.
- (39) 三五〇〇万という数字はおそろしく誤りだ。実際には公称も含めて三八〇〇万の声が多い。Goldberg, *ibid.*
- (40) Lilian Kwon, "Apologet: Christianity Losing Out to Secular Humanism?," *The Christian Post*, February 17, 2010.
- (41) Kwon, *ibid.*
- (42) Associated Press, "Bill Nye the 'Science Guy' Debates Head of Creation Museum on Evolution, Earth's Origin," *Fox News Channel*, February 5, 2014.
- (43) Associated Press, *ibid.*
- (44) Associated Press, *ibid.*
- (45) Associated Press, *ibid.*
- (46) Ivan Karp and Gustavo Buntinx, "Tactical Museologies," (*Museum Frictions: Public Cultures/Global Transformations*, edited by Karp Ivan, 207-218. Durham, NC: Duke University Press, 2006), 208.
- (47) Steven Conn, *Do Museums Still Need Objects?* (Philadelphia: University of Pennsylvania Press, 2010), 1-57. 「ナチス技術革新など媒介物による再現性の高まりなどを背景にして、モノそれ自体を展示する以上に「モノの實在感」を展示することが可能になってきた近年では、ミュージアムでモノの存在価値が後景化し「本物の展示」が来館者に真実性を与えなくなったと述べた。真実性の観点でもミュージアムは「神殿」ではなくなっている」とある。
- (48) Bruno Latour, *We Have Never Been Modern* (Cambridge: Harvard University Press, 1993).
- (49) Latour, *ibid.*, 91-94.
- (50) 文化の盗用 (appropriation) については John C. Welchman (*Art After Appropriation*, London: Routledge, 2003) の議論などがあるが、本稿の関心と同じく、盗用する／される主体の権力構造に注目した柳沢史明（『ニトロ芸術』の思想文化史）水声社（二〇一八年「七四一八」）の解説では「領有／流用」と訳し分けている。拙著『「知る」からはじめる楽しい政治』（講談社、近刊、第一四章）では「盗用／奪用／転用」とした。
- (51) 科学論における文化戦争について事例・先行研究・資料などのまとめは、金森修『サイエンス・ウォーズ』（東京大学出版会、二〇〇〇年）に詳しい；以下はミュージアム論から文化戦争を解説。Steven Conn, "Science Museum and the Cultural Wars" (*A Companion to Museum Studies*, edited by Sharon MacDonald, 494-508. London: Blackwell Publishing, 2006).

（武蔵大学人文学部准教授）

Weaponizing Science: Using “Bothsidesing” Tactics in Creation Science Museums

KOMORI, Masaki

When people accept a fact as “true,” what kind of social construction takes place in the process of making “truth”? To answer the question, this paper examines museum exhibits on faith and science in museums. For its case study, the paper explores creation science museums, which try to demonstrate scientific and historical evidence of the creation story in the Bible.

Since the emergence of the theory of evolution, the question of whether the origin of human beings is “God’s creation” or “the result of biological evolution” has traditionally been harshly contested in American society. The controversy has developed into a social movement and has been politicized. This study attempts to historically understand this situation. By outlining the history of counter-speech tactics utilized by religious conservatives and, at the same time, discussing the relationship between such strategies and museums, this paper criticizes the current state of museums, which have been deemed as the media that certify historical and scientific “facts.” How do museums function as devices for fabricating “truth”? How “bothsidesing” discourse, which emphasizes that both sides should be equally considered for scientific knowledge, are weaponized there? While considering these questions, this paper critically examines models attempt to understand the United States as “polarized” society.

This paper comprises five chapters. Chapter 1 reviews the Christian Right movement from the perspective of scientism and provides a historical context for understanding the process by which “debate” came to be used as a tactic to justify religious truth. Chapter 2 outlines the invention of creation science museums, which try to offer scientific and historical evidence of the accuracy of biblical stories. Chapter 3, through the analysis of exhibits and talk shows at the Creation Museum in Kentucky, closely examines “bothsidesing” discourse in museum context. Chapter 4 examines how the media’s narrative about the museum and its social acceptance, whether intentionally or unintentionally, supports the effects of this tactic. Chapter 5, by combining museum studies and anthropology of science, theoretically analyzes how scientism functions as a weapon through “bothsidesing” discourse.